

## 薬物依存症の治療体制強化を訴える精神科医

和田 <sup>わた きよし</sup>清さん (60)

石川県出身。千葉大医学部卒。国立精神・神経医療研究センターの薬物依存研究部長を18年務めた。

取り締まりに偏った日本の薬物乱用対策は間違っている。再発率が高い薬物事犯を減らすためには、依存症という精神疾患の治療が不可欠だと訴え続けてきた。専門病院が数えるほどしかない貧弱な依存症治療体制の実態を綿密な調査で明らかにしたことで、国もようやく重い腰を上げ、体制整備に乗り出した。

高校時代、患者への暴力や不当な拘束など精神科病院を巡る不祥事が相次いで報じられていた。「患者の人権を守りたい」。そんな思いから、精神科医を志した。

公立病院勤務を経て1989年、国立精神・神経センター(当時)の薬物依存研究部に入った。新設されて間もない部署だった。2年後、米国立薬物乱用研究所に客員研究員として派遣され、充実した体制を目の当たりにした。帰国すると、その経験を生かして研究部に実態調査、動物などによる基礎実験、診療体制の3本柱を確立させた。

薬物依存者の治療と社会復帰施策の推進に貢献したとして、更生保護に尽力した個人や団体に贈られる瀬戸山賞を9月に受賞した。「日本は先進国の中で治療体制が最も貧しい。危険ドラッグ問題が注目されている今こそ、体制づくりに本腰を入れる時だ」

今春センターを定年になった後、埼玉県立精神医療センターに部長として招かれた。後輩を指導しながら患者と向き合う日々が続く。

文・江刺正嘉 2015.10.22